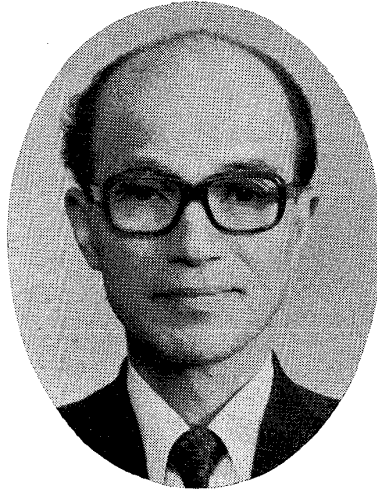


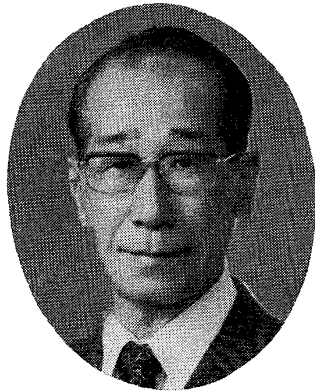
日 本 鉄 鋼 協 会 役 員

会 長

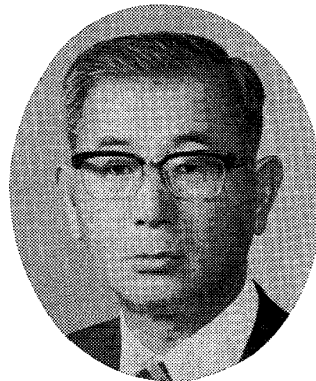


荒 木 透 君
金属材料技術研究所所長

副 会 長

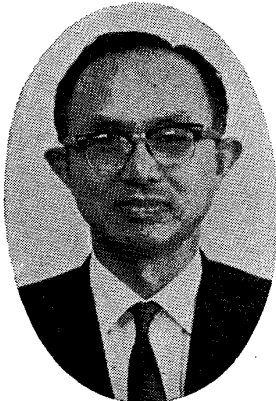


松 下 幸 雄 君
東京大学教授

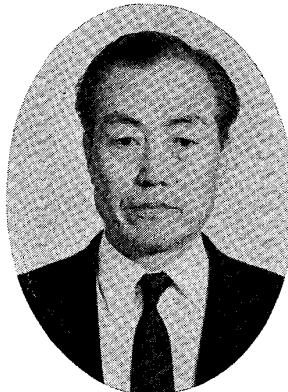


八 木 靖 浩 君
川崎製鉄(株)専務取締役

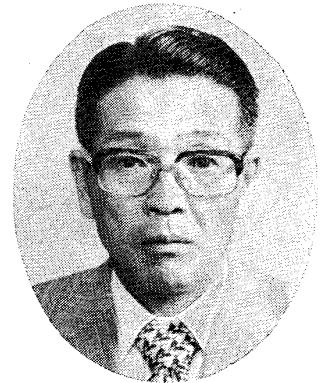
理 事



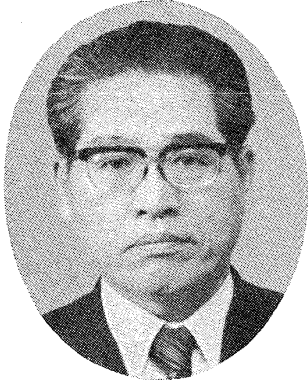
田 畑 新 太 郎 君
専務理事



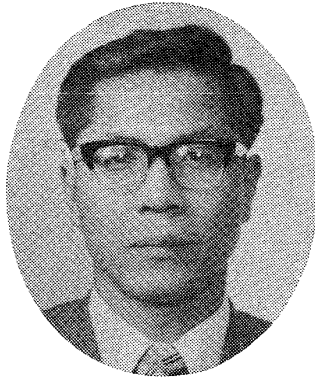
吉 田 道 一 君
常務理事



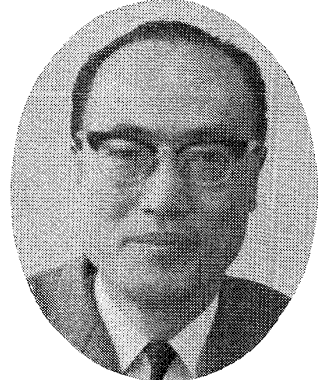
池 見 恒 夫 君
(研究担当)
(株)日本製鋼所取締役



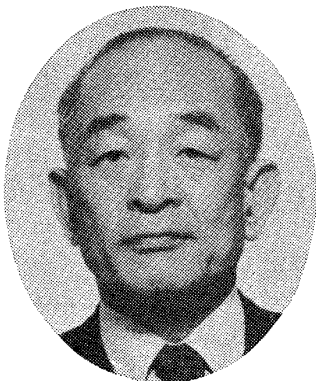
岩崎 元君
 (企画担当)
 (株)中山製鋼所取締役



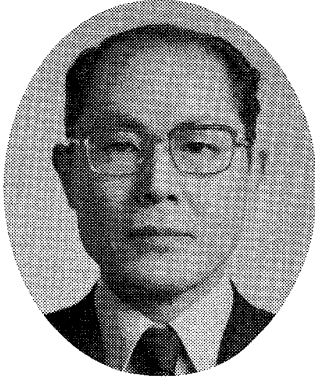
荻野 和己君
 (研究担当)
 大阪大学教授



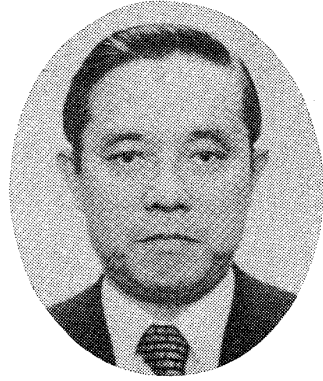
上杉 年一君
 (企画担当)
 山陽特殊製鋼(株)専務取締役



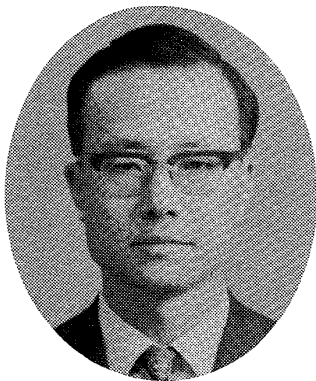
漆山 信夫君
 (企画担当)
 大同特殊鋼(株)常務取締役



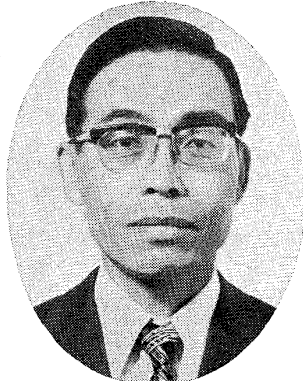
大森 康男君
 (編集担当)
 東北大学教授



大日方 達一君
 (庶務・会計担当)
 新日本製鉄(株)鋼管技術部長



加藤 栄一君
 (研究担当)
 早稲田大学教授



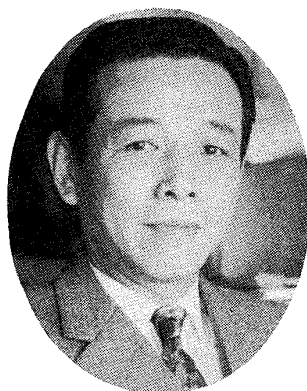
片岡 修君
 (企画担当)
 (株)神戸製鋼所取締役



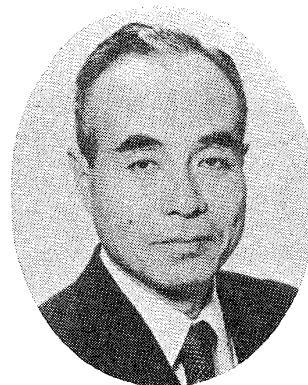
小関 伝君
 (企画担当)
 (社)日本鉄鋼連盟技術管理部付



近藤 豊君
(会計担当)
住友金属工業(株)東京技術部長



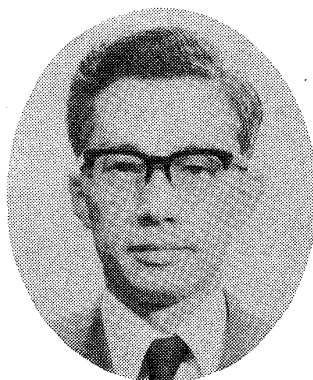
坂尾 弘君
(研究担当)
名古屋大学教授



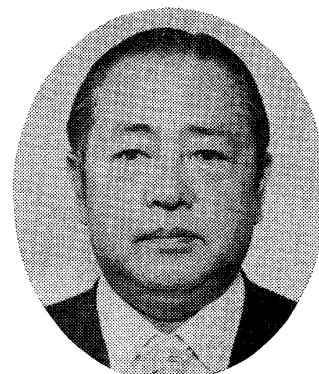
佐々木 進君
(会計担当)
日新製鋼(株)常務取締役



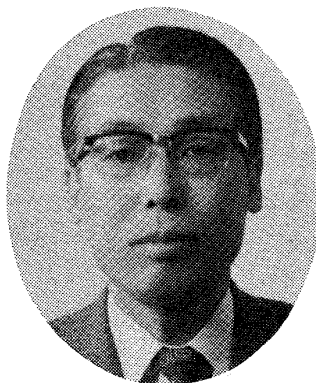
島田 仁君
(庶務担当)
科学技術庁海洋開発課長



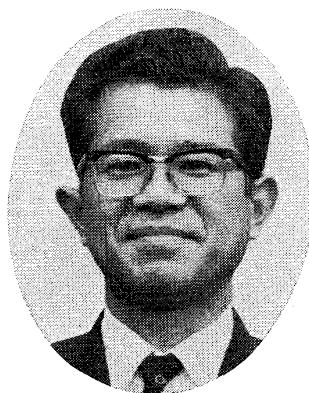
相馬 胤和君
(編集担当)
東京大学教授



高石 誠二君
(企画担当)
合同製鉄(株)専務取締役



高橋 忠義君
(編集担当)
北海道大学教授



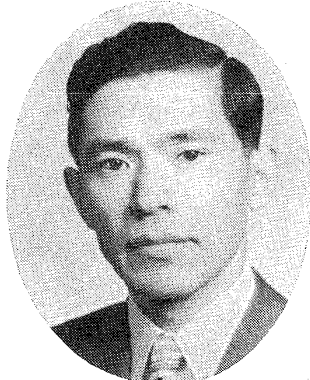
田村 今男君
(研究担当)
京都大学教授



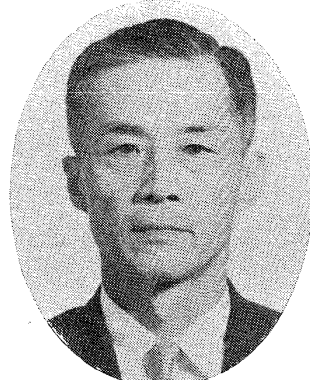
田中 良平君
(編集担当)
東京工業大学教授



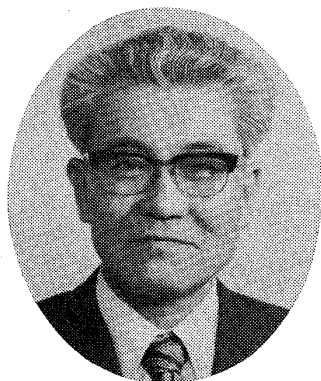
中川龍一君
(研究担当)
金属材料技術研究所
工業化研究部長



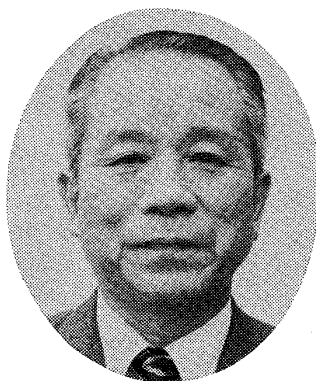
西沢泰二君
(編集担当)
東北大学教授



細木繁郎君
(会計担当)
新日本製鉄(株)取締役



松田公扶君
(研究担当)
九州大学教授

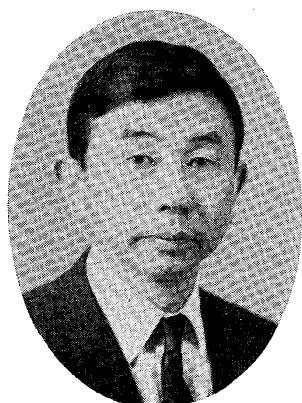


矢野巖君
(会計担当)
東洋鋼鋸(株)専務取締役

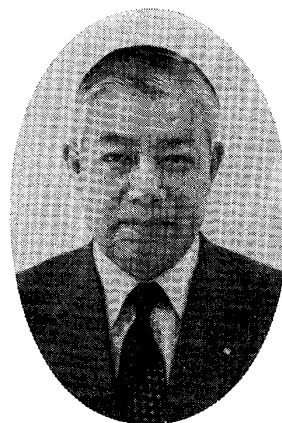


山田浩蔵君
(会計担当)
日本鋼管(株)常務取締役

監 事



青山芳正君
日新製鋼(株)常任顧問



安藤卓雄君
東洋鋼鋸(株)常務取締役

新 名 誉 会 員



(株)日本製鋼所会長
工博 小 林 佐三郎 君

博士は昭和2年3月浜松高等工業学校応用化学科卒業後直ちに(株)日本製鋼所に入社、室蘭製作所技術研究所第3部長、作業部長、同製作所所長を経て昭和22年5月取締役就任、その後常務取締役、副社長を歴任、昭和40年11月同社代表取締役社長に就任、昭和48年11月同社代表取締役会長となり現在に至っている。

博士はこの間終始鉄鋼業の発展に尽力し、昭和13年4月には「溶解、造塊、鍛造、熱処理の製造各工程における水素の影響」を解明し、「鉄鋼に関する学術技術上の進歩発達に顕著なる貢献をなしたるもの」として本協会の服部賞を受けるとともに、昭和14年東京帝国大学より工学博士の学位を授与された。その後も「研究を中核とした鑄鍛鋼品の製造」に常に指導的立場にあつて努力を続け、大形鑄鍛鋼品の製造法を確立し、また火力発電、原子力発電などに使用される極厚鋼板および各種高級鋼板の製造に成功した。これらの大形鉄鋼材料を製作することにより、設備機器の巨大化、高性能化したわが国各種工業の飛躍的発展に寄与する一方、水力発電機用大形水車、あるいは世界最大級の塔槽類など大形溶接構造物製造技術で世界をリードするまで発展させた博士は今日まで高邁な識見と卓越した先見性、独創性ををもった技術者として、また企業経営者として常に技術革新の進展に対応し、鉄鋼業を発展に導いた業績は多大なものがあります。

また、本会においては昭和27年から2年間副会長を、昭和50年4月から2年間会長として本会の発展に尽力したほか、関連諸団体の要職にあつても広く科学技術の発展、業界の育成、協調体制の確立に努力を傾注した。

この間、昭和44年に「わが国鉄鋼業の進歩発達、特に大型鉄鋼製品製造技術の発展」に対する功績で本会渡辺義介賞を受賞されている。

新名誉会員



Managing Director of the American Society for Metals

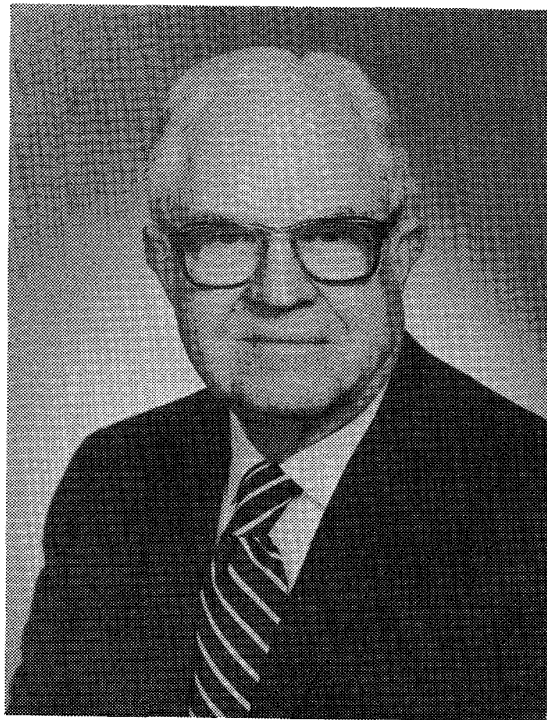
Mr. Allan Ray Putnam

Putnam 氏は Pennsylvania 大学の Wharton School で経済学を学び 1942 年に卒業した。4 年間空軍将校を兵役後、1946 年から American Electroplater's Society の Executive Staff, 1949 年から Society of Manufacturing Engineers の Assistant Executive Secretary と “The Tool and Manufacturing Engineer” の編集者として活躍、1958~1959 年には Council of Engineering and Scientific Society の会長を歴任した。

氏は 1959 年に American Society for Metals の Managing Director に就任、以来今日までその重責にある。特に出版ならびに教育両部門の拡充を図り、ASM が内外で声望高い活発な活動を行なっている基盤を確立した。出版物としては ASM Metals Handbook, Metal Progress, ASM News, Metallurgical Transactions (AIME と共同出版), Ironmaking and Steelmaking, Metals Abstracts, Metals Abstracts Index, International Metals Reviews (The Metals Society と共同出版) が挙げられる。また教育部門では、1) Metals Engineering Institute (大学教育程度の知識習得), 2) Academy for Metals and Materials (技術者、管理者を対称に最新知識の習得) を中心として、金属分野全般に亘る講座科目を設けてあり、講習会、通信教育などの体制を整備、運営しているが、これは Putnam 氏の卓越した企画力と指導力に負うところが大きい。

Putnam 氏は国際間の交流も積極的に推進して、多くの国々の関係学協会と密接な関係を持っている。本会とは 1977 年に切削性国際シンポジウム (東京) を共催したのをはじめ、鉄鋼科学技術国際会議 (1970 年, 東京), これを引継いだ第 3 回国際鉄鋼会議 (1978 年, Chicago) では相互に協力して会議を成功に導いた。

俵 賞



名誉会員, 元 U. S. Steel 社副社長
Dr. James B. Austin

Austin 博士は 1925 年 Lehigh 大学化学工学科卒業, さらに Yale 大学大学院に学び, 1928 年 Physical Chemistry で PhD の学位を取得, また 1962 年に Lehigh 大学からも Doctor of Science の名誉学位が贈られた. 1928 年 Yale 大学卒業後, U. S. Steel 社に入社, 新設された研究所に勤務, 1946 年研究所長, 1956 年基礎研究担当副社長, 1958 年研究・技術担当副社長に就任 1968 年引退まで研究・技術の最高責任者として活躍した.

Austin 博士は化学と金属熱力学および高温における金属や耐火物の熱膨張と熱伝導の領域において業績があり, 多くの論文を発表している.

Austin 博士は学会の事業に深い理解を持ち, 卓越した識見と指導力は高い評価を受け, 前人未達の ASM (1954年), AIME (1973年) と両学会会長を歴任した. ASM では Campbell 記念講演 (1947年), AIME では Howe 記念講演 (1970年), Krumb 講演 (1969年) を行なった. また AIME から 1969 年に Benjamin F. Fairless Award, Yale 大学から 1968 年に Wilbur Cross Gold Medal が贈られた. 1967 年に National Academy of Engineering の会員に選出されているほか, 日本鉄鋼協会 (1965年), The Metals Society, ASM, AIME の名誉会員に推挙されている.

Austin 博士と日本の鉄鋼界は密接な関係を有し, 鉄鋼技術者が博士を訪問, 博士も 1959 年以降数次に亘つて来日し, 技術の指導, 貴重な Advise を行ない我が国鉄鋼業の発展に貢献された. 1965 年の本会創立 50 周年記念式典において名誉会員に推挙された. 1970 年東京での鉄鋼科学技術国際会議を引継いだ, 第 3 回国際鉄鋼会議を 1978 年 Chicago で開催, 運営委員長として尽瘁の努力をされた.

Austin 博士は日本文化への造詣が深く, 特に版画の収集家として知られ, 日本の浮世絵専門誌に「十返舎一九の東海道中膝栗毛絵巻」の記事が掲載された. 収集された平安時代の仏教画から浮世絵, 近代の創作版画など 600 点以上が 1976 年に Pittsburgh の Carnegie Museum of Art で展示され, 後に全点を同美術館に寄贈された.